

「国立台湾大学派遣参加報告書」

京都大学文学研究科 1 年 三輪大樹

今中国で、台湾旅行が流行っているという。中国の国民的作家である韓寒が、紀行文の中で台湾の人々を絶賛したことが影響しているようだ。私自身、とある事情からこれまで何度も台湾に旅行し、現地の人々のあたたかさや親切さに感動したものである。しかし、旅行は生活ではない。旅行はあくまでも旅行に過ぎない。旅行で知ることのできることは、ほんのわずかである。私は、台湾で生活がしたかった。三週間というまとまった期間、台湾で生活し、現地の大学生と学ぶことができれば、少しは台湾への理解が深まると思ったからだ。そんな思いで、国立台湾大学への留学に参加した。

国立台湾大学では、午前には語学の授業、午後にはフィールドワークや台湾の文化に関する講義が行われた。語学の先生は、国語（標準語）が非常にお上手な方であった。台湾にはいわゆる標準語としての国語があるものの、実際には方言色の強い言語が広く話されている。せっかく台湾に来たのだから、カチカチの共通語ではなくやはり台湾人が日常で話すような言葉を学びたいものである。そこで、我々学生たちは話し合っ、先生に現地風の中国語で授業をしていただくようお願いした。もちろん、このようにわざわざ先生に頼まなくとも、町に出ればみんな台湾風の中国語を話している。午前の授業が終わった後の昼休みに、大学近くの食堂で現地のおじさん・おばさんたちとお話する時間が、私にとって一番の中国語の授業であったことは言うまでもない。

午後の授業も、非常に興味深いものであった。印象的なのは、フィールドワークで龍山寺の付近に行ったことである。この辺りは浮浪者がとても多く、台北の中でも特に独特な場所として知られている。周辺の商店街や夜市には、妖しげな店が所狭しと立ち並ぶ。大学が我々をここに招いた理由はわからない。しかし、これこそ台湾の生活の一面であり、真実なのであると感じた。同じ台北市内でも、絢爛たる 101 の逆側には、かくまでも生活感の溢れる街が広がっている。観光では知ることのできない台北である。

ところで、私は、教師になりたいと考えている。ただの教師ではない。台湾ないしは中国や香港の日本人学校で、日本人の子供たちに国語を教えたいのである。今回の台湾留学は、私の海外勤務への憧れを更に強めるものとなった。個人的に印象的だったのは、留学に参加していたある日本人帰国子女学生の話である。祖国を遠く離れ、異国の地にいるという不安感は、言葉では言い尽くせないほどであったという。私は、今現在台湾に住んでいる日本人の子供たちには終に出会うことはできなかった。しかし、彼のような不安を抱えている子供たちは台湾のどこかに必ずいるはずである。私は、更なる中国語の研鑽を行い、彼ら子供たちのために働こうと強く感じた。

今回の海外留学は、総じて私の人生にとって非常に意義深いものであったと思う。